2400

W
学位論文
2400
2

博士（人間科学）　学位論文　概要書

色彩嗜好の構造に関する心理学的研究

（国際比較研究を通して）

１９９７年１月

早稲田大学大学院人間科学研究科

齋　藤　美　穂

本論文は、アジアでの色彩嗜好の国際比較研究を中心として、白嗜好に関する考察と色彩嗜好に対する地理的文化的影響要因を総合的に検討し、さらに嗜好の構造に関して考察することを主な目的としたものである。

従来、色彩嗜好の研究は年齢や性別といった個体的側面での差異が研究の中心となり、環境的側面の中でも文化的要因によって影響されるか否かという点に関しては、研究者でも見解の分かれるところであった。また色彩嗜好を国際比較するという研究自体も少ない。

筆者が日本人の色彩嗜好を国際比較するという試みを初めて行ったのは1979年の研究からであるが、その際に日本人の白に対する嗜好が欧米の地域などで得た結果と比べると特徴的であることが明らかとなった。それ以後、調査を重ねていく過程の中で、地理的文化的環境要因が色彩嗜好に影響を与える可能性があることが示唆された。また特にアジアで行われた色彩嗜好の研究数自体が少なく、白嗜好という観点からアジアでの色彩嗜好を比較検討する必要性が感じられるようになった。そのような必要性をきっかけとしてアジアでの色彩嗜好の国際比較調査を行い、その結果から色彩嗜好における文化的環境要因を考察することにした。

第1章では、色彩嗜好に対する影響要因として従来から考えられている主な事象をとりあげた。色彩の感情効果や色彩嗜好に関連する諸事象等を取り上げ関連する研究を紹介した。色彩と形態との関連については、特に現実の場面における色彩との関連として、肌の色の嗜好を日本とインドネシアで比較した調査を紹介してその文化的差異を検討した。数量化3類による分析の結果では、色白肌に対するイメージは両国で異なり、そのような嗜好には文化的なある種

の基準があると考えられた。またこの章では単色による感情と配色による感情とのかかわりや色彩嗜好とパーソナリティーテスト等の中で特徴的な色彩の傾向に関しても述べた。

第2章では、日本人の色彩嗜好について、特に戦後行われた日本での主な研究から検討した。また日本国内での地域差に着目した研究や色彩嗜好傾向の類型化を中心とした研究から日本人の色彩嗜好に総合的な考察を行った。1600人を対象として日本の4都市で行った筆者らの因子分析とクラスター分析を用いた研究結果からは、特定の色に対する嗜好とライフスタイルとの関わりが示唆された。しかし先行研究の結果と同様、4都市では地域差と呼べるほどの有意な差は得られなかった。さらにこの章では色彩嗜好研究として日本、欧米、アジアで行われた主なものを報告するとともに、色彩嗜好の国際比較研究を紹介した。国際比較研究ではアジア地域を除いた地域での主な研究および筆者が1979年より行っている国際比較調査結果を含めて述べた。一連の研究の分析結果から、欧米などの地域と比べて日本での白嗜好が特徴的であることや、地理的文化的環境要因の重要性などが指摘された。

そこで第3章ではアジアにおける色彩嗜好の国際比較研究を日本、韓国、台湾、中国、インドネシアとの比較で考察した。双対尺度法やコレスポンド分析を用いた分析結果をもとに、ここでは特に地理的文化的環境要因が各地域の色彩嗜好にどのように反映するか検討した。またそれまで述べてきた全ての研究を通して各地域での色彩嗜好を総合的に考察した。青を普遍的な嗜好色と呼べるかどうかという点に関して数々の先行研究の結果等を考察しながら検討したが、特定の青に対しては国際比較研究を通じて共通して嗜好率の非常に高くな

る色であることは確認できたと考えられる。

第4章では、アジアで共通して高く見られた白嗜好を中心として、白嗜好の文化的背景を検討し、地理的文化的環境要因と色彩嗜好とのかかわりについて考察した。そして最後に色彩嗜好のみならず人間の嗜好が形成される際に考えられ得る要因とその構造を検討した。欧米などの地域と比較したとき、日本にのみ独特であると考えられた白嗜好は、アジアで調査を進めていくに従い日本以上に好まれることがわかったが、アジアのどのあたりの地域にまで白嗜好の広がりが及んでいるのかに関しては今後の統合的な研究が必要だと考えられた。

またこの章では嗜好の構造の1モデルを提案したが、そのモデルの構造は「快ー不快」の感情を核として、その周りを個人的要因と環境的要因が取りまく三層構造として提案した。嗜好は個人要因にも環境要因にも影響され変化する。快ー不快の感情に関しては人間の基本的で普遍的な感情であると思われるが、嗜好のような感性に基づく感情は決して普遍ではなく、個人的要因や文化といった環境要因によっても異なることが本論文における一連の研究結果から示唆されたと考えられる。換言すればそれぞれの文化ごとに嗜好の枠組みや基準が存在すると思われる。

いずれにしても色彩嗜好において地理的文化的環境要因は重要であることが本論文の結論として導かれたと考えられる。しかしながら、複雑な文化的環境要因を考慮しながら嗜好の予測式をたてるというという事が可能かどうかの検討をも含めて、色彩嗜好を初めとする人間の嗜好をより深く追求するためには、今後、心理学のみならず文化人類学や脳生理学などの様々な分野から統合的に研究される必要性があることが示唆された。